

福岡城跡

—福岡城中堀跡の調査—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第498集



1997

福岡市教育委員会

序

福岡市は、まちづくりの目標の一つに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市形成史の中で現在の基盤を確立したのは福岡城築城を源とするものです。福岡城跡は、城郭の中心部分が国史跡として保護され、さらに舞鶴公園として市内外の人々に親しまれているところです。

さて、築城時には福岡城とその東方を流れる那珂川との間に中堀と肥前堀とが築かれていましたが、明治時代以降には埋められてしまい、現在ではその姿を見ることができなくなりました。

今回報告いたしますのは、平成7年に実施いたしました中堀跡の発掘調査の報告書です。今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、土地所有者の中江健三氏および発掘調査にあたり御指導と御援助をいただいた関係各位に深く感謝いたします。

平成9年1月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

目 次

I はじめに.....	(瀧本正志)	1
II 遺跡の環境と概要.....	(〃)	2
III 調査の記録.....	(〃)	4
IV 石材鑑定.....	(唐木田芳文)	10
V おわりに.....	(瀧本正志)	15

凡 例

1. 本書は、福岡市教育委員会が1995年度（平成7年度）に実施した福岡城中堀跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構・測定に付した座標値は、平面直角座標系第II座標系による座標値である。
3. 遺構・遺物の実測図は中村智子・瀧本正志、写真は瀧本正志による。
4. 唐木田芳文氏（西南学院大学名誉教授）から玉稿を頂戴した。
5. 本書の執筆は日次に示し、編集は瀧本正志が担当した。
6. 発掘調査の遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査地	福岡市中央区大名1丁目81他	遺跡名	福岡城中堀
調査期間	平成7年12月12日～27日	調査面積	154m ²
調査番号	9 5 4 6	遺跡略号	F U E - 32

表紙：福岡御城下絵図（福岡市立図書館蔵）

裏表紙：福岡城下の櫓御門前

I はじめに

1. 発掘調査に至る経過

福岡城中堀は、福岡城内堀から那珂川までの1.3kmの間に掘られた堀で、その西半分の名称である。福岡城の城郭は国史跡として指定され、城と一体を成す中堀・肥前堀は周知の埋蔵文化財包蔵地として福岡市文化財分布地図に記載されている。

1995年(平成7年)8月24日付で、福岡市中央区大名1丁目81他4筆における開発行為にともなう埋蔵文化財事前審査願いが土地所有者の中江健三氏から埋蔵文化財課へ提出された。書類審査の結果、当該地には中堀の南岸および堀の内部が想定されることから、現地において試掘調査が必要であるとの結論に達した。このため、1995年(平成7年)11月9日に当該地においてバッカフォーを用いた試掘調査を実施した結果、地表下0.6mにおいて東西に連なる石垣を検出し、中堀の南岸および堀の内部の存在を確認した。

福岡市教育委員会は、試掘調査の結果をもとに土地所有者の中江健三氏と遺跡の保存についての協議を行い、現状保存については困難である認識のもとに記録保存を前提とする発掘調査を実施することとなった。発掘調査の実施にあたっては土地所有者の中江健三氏と福岡市(市長 桑原敬一)との間で発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を教育委員会埋蔵文化財課が行い、調査費用を中江氏が負担することとした。

発掘調査は、1995年12月12日～同年12月27日、出土遺物の整理・報告書の刊行は1996年9月～1997年3月に行った。

2. 調査の組織

調査委託	中江 健三		
調査主体	福岡市教育委員会		
	教 育 長	町田 英俊	尾花 剛(調査時)
	文 化 財 部 長	後藤 直	
	埋蔵文化財課長	荒巻 輝勝	
	同課第2係長	山口 讓治	
調査担当	文 化 財 主 事	瀧本 正志	
事務担当		西田 結香	
調査補助		中村 智子	
資料整理	岩瀬宏子 甲斐田嘉子 川野尚子 筒井敦子 宮坂 環 牟田山佳 山口とし子		
調査協力	石屋四一 池田福美 榎田信一 甲斐康完 川井田明 濑戸啓二 別府俊美 松尾文江		

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と環境

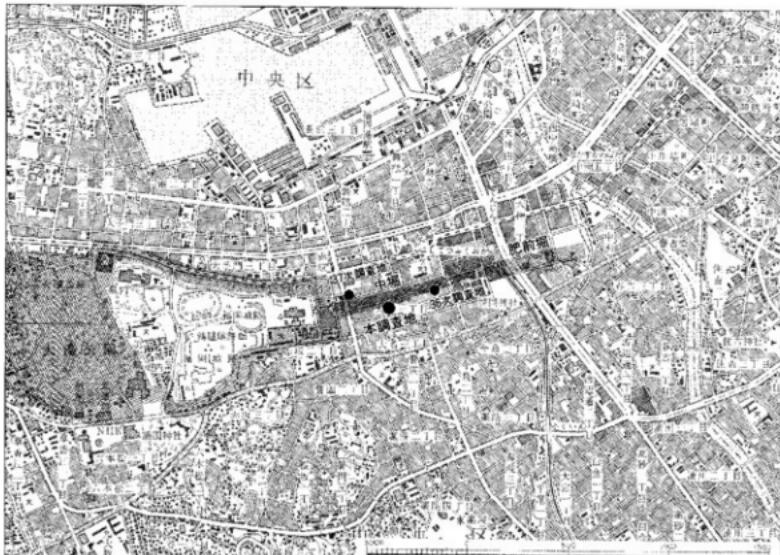
福岡城は、慶長6年(1601)～同12年(1607)にわたり、關ヶ原ノ戦の恩賞で豊前国12万石から筑前国52万石に転封となった初代藩主黒田長政が博多湾岸をめぐる海岸線中央に位置する福崎丘陵先端部の高台の地に築いた平城である。堀はP. 2に示すように、福岡城築城時には城郭の周囲(内堀)と城の東方に位置する那珂川までの1.3kmの間に掘られた那珂川までの堀には西端に赤坂門、中央に薬院門、東端に数馬門(春吉門)の三門が置かれ、赤坂門～薬院門を中堀(もしくは組屋町堀)、薬院門～数馬門を肥前堀(もしくは佐嘉堀)と呼ばれていた。

今回報告する中堀および東に連なる肥前堀は、築城時当初は素掘りの堀であったが、文化9年(1812)～同10年(1813)に残島(能古島)産の石を用いて、土墨石垣に改築した文書記録が残る。⁴¹⁾また、堀の南岸は石垣、北岸は石垣とその上に土塁を築いた状況は、P. 2に示すように、改築前と改築後の城絵図で違いを知ることができるとともに、調査地が、町人屋敷地であったことも城絵図で知ることができる。しかしながら、同時期に石垣に改築されたはずの肥前堀は、同堀の4次にわたる調査でも石垣の存在が確認されていない。

敵襲から城下を守るために造られた両堀とも、明治末以降には順次埋められ、宅地や道路、役所の庁舎地となり、昭和初期にはその姿を見ることができなくなった。現在では、土地の境界に堀岸の名残りを記すのみである。

調査地は、赤坂門の東方260mに位置し、標高2.5mを測る。

註1 神垣光吉監修「吉田家傳跡」大宰府天満宮 1981



調査地位置図(1/25,000)



福岡城築城時(福岡御城下絵図)

※福岡県立図書館蔵



中堀改築後(福岡城下町・博多・近隣古図)

※九州大学九州文化史研究施設蔵

III 調査の記録

1. 調査の経過

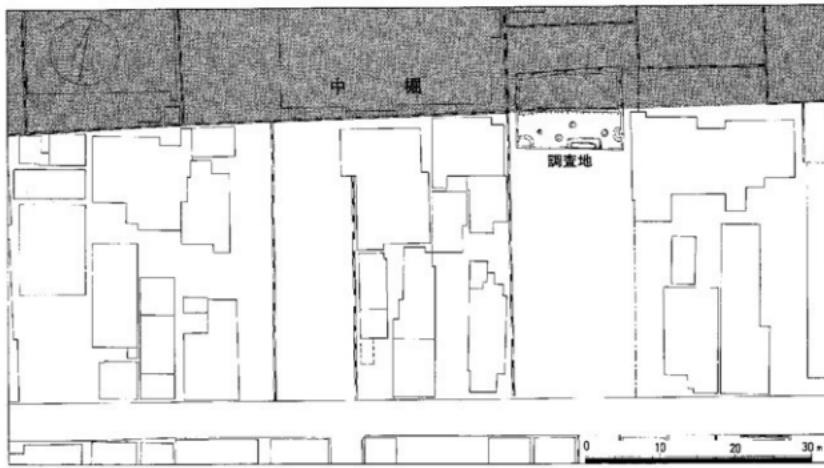
発掘調査は1995年12月12日に着手した。石垣の調査範囲は、事前の調査打合せで地中梁工事で支障（破壊）になる範囲だけに限定され、他は保存することになっていた。このため、バックフォーにより極めて狭い範囲の表土・堀埋土の除去を試みたが、機械の機能や調査時の安全面からも断念し、全面的に堀の内側を広くバックフォーで掘り下げて石垣の検出を行った。その結果、石垣が良好な状態で現存していることを確認した。調査途中には石垣の石材鑑定を唐木田芳文先生（西南学院大学）にお願いした。調査は同年12月27日に終了したもの、その後に建設工事で一部を破壊する計画であった石垣が完全に消滅したことは真に残念であった。

2. 遺構

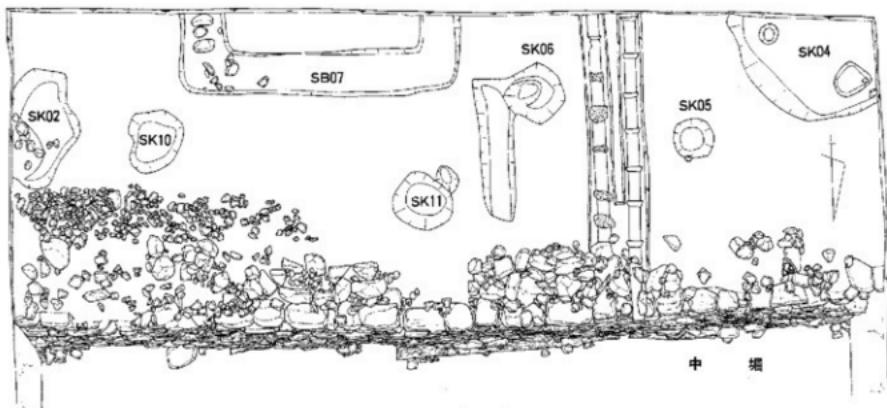
検出した遺構は、堀（石垣）、建物、土坑、排水施設等で、近世・近代の時期の所産と考えられる。

石垣は、表の面を北にして東西方向に連なり、調査では延長14m・高さ2.2mを検出したが、さらに調査区の外へ続いている。石垣は、野面石を使用した穴太積による。石積みの構築は、白色砂の地山を浅く地形根切りし、根石の下面のやや石面近くの位置に径25cm前後の松の丸太（胴木）を一列に置き、その上に根石を前上がりの状態に並べている。地山面には胴木の他は敷石などの沈下を防ぐ工法や胴木の滑り（逃げ）を防ぐための杭は認められなかった。根石は1本で配置され、上段で使用されている他の築石よりも大きいものの際立った差は無い。根石の上にはコンテナ箱程の転石を6～7段に乱石積する。奥行き1mの裏込には、拳大から人頭大の転石が用いられている。堀底の標高は0.5mを測る。

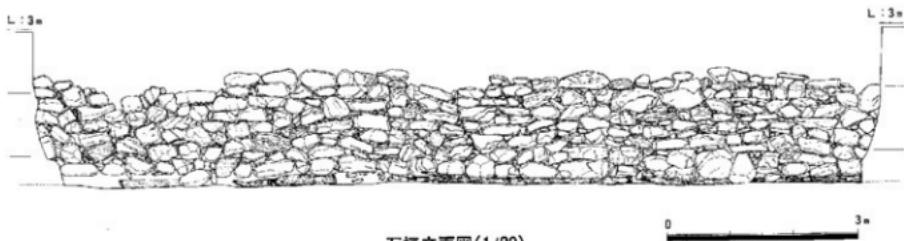
建物基礎は、炬方に幅60cm前後の溝を掘り、底に丸・平瓦を敷き詰めた上に人頭大の転石を置いている。軟弱な地盤に対応したものであろう。建物は、梁行二間の規模の土蔵建物と考えられる。



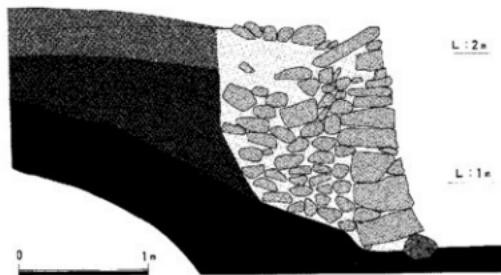
調査区位置図(1/700)



造構配置図(1/80)



石垣立面図(1/80)



石垣断面図(1/40)



調査全景(北から)



中堀石垣東部(北から)



中堀石垣東部(北から)



中堀石垣中央部(北から)



中堀石垣中央部(北から)



中堀石垣西部(北から)



中堀石垣西部(北から)



中堀石垣補修部分(北から)



中堀石垣補修部分(北から)



中堀石垣西半部(東から)



中堀石垣裏込(東から)



中堀石垣全景(東から)



中堀石垣断面(東から)

3. 遺 物

遺物は堀の埋土内から出土した。上層からは近代（明治～大正期）のワイン瓶、ビール瓶、薬瓶、化粧用水瓶、仏前陶器の他、土瓶などの生活雑器が出土し、堀底からは中国製や肥前系の皿、椀等の陶磁器が出土している。

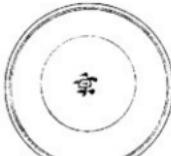
SK11



96

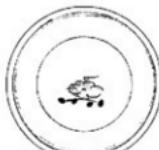


93

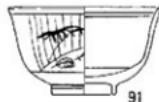


幸

92



車



鳥

中堀上層



64



75



76

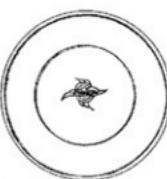
中堀下層



90



火



魚



84



81

84

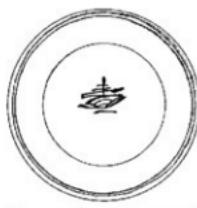


喜

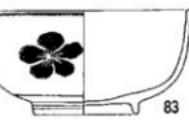
喜

喜

喜



火



花

0 10cm

石堀裏込



99

0 5cm



80



82

出土遺物実測図(1/2, 1/3)

SK11



96



91



95



92



93



97

中壇上層



64



55



71



72



74



73

中壇下層



90



75



76



86



79



80



81



84



82



83

石垣裏込



99

出土遺物

IV 石材鑑定

— 福岡城中堀石垣(大名一丁目)の石材鑑定 —

西南学院大学 唐木田 芳文

1. まえがき

福岡市教育委員会の依頼により、1995年12月22日に、発掘中の福岡城中堀石垣(大名一丁目)の石材を調査した。現地調査では、石垣のインスタント写真(計8枚)と照合しながら、岩塊の一つ一つの石材を肉眼で鑑定(判定)した。そのあとの室内作業では、それらのデーターを写真(写真1)をもとにして描かれた石垣の石材分布図(図1)にまとめ、それらの石材データーと、福岡地域でなされたこれまでの地質学的研究成果とを比較・検討した。その結果、石垣の石材は博多湾周辺地域から集められたものであるという結論をえた。

2. 石垣石材の岩石

石材は岩質から次の10グループ(a～j)の岩石種に分けられ、石垣では図1のような分布を示す。

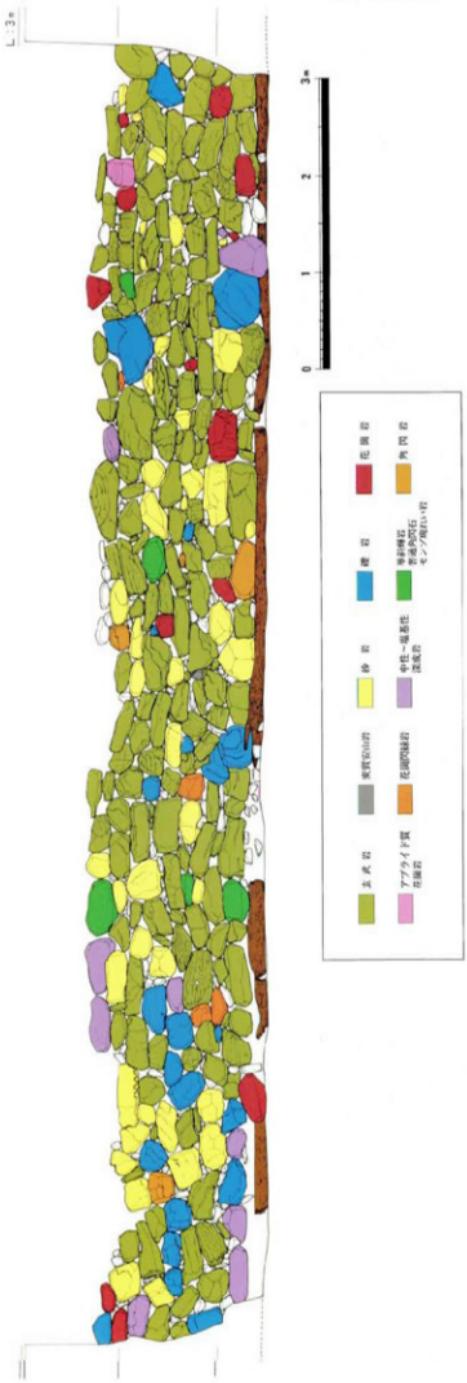
- a)玄武岩 b)変質安山岩 c)砂岩 d)礫岩 e)花崗岩
- f)アブライトイット質花崗岩 g)花崗閃綠岩 h)中性～塙基性深成岩
- i)單斜輝石普通角閃石モンゾ斑れい岩 j)角閃石

岩石の記載

- a)玄武岩：黒灰色、緻密な石基の中に、1～数cmの黒色斑晶が散在する。おもな斑晶鉱物は、角閃石から変質して生じたオバサイト(鉄鉱・輝石などの微粒結晶の暗黒集合体)で、かんらん石の存在は明らかではない。板状に割れるものが多い。
- b)変質安山岩：変質して淡青色になった緻密な石基中に、柱状の角閃石斑晶が認められる。
- c)砂岩：細粒、中粒、粗粒のものが見られるが、中粒砂岩がもっとも多い。
- d)礫岩：最大径約0.5mmの礫をふくむ細粒礫岩と最大径1～2mmの礫を含む中粒砂岩が見られるが、後者がやや多い。
- e)花崗岩：おもに粗粒、塊状の黒雲母花崗岩。中には中粒のものも見られる。また、斑状のカリ長石をふくみ、早良花崗岩とみなされるものもある。



調査位置図(1/50,000)



調査地中堀跡石垣全貌(左から)

f) アブライト質花崗岩：砂粒、塊状で、優白質。

g) 花崗閃緑岩：粗粒、塊状で、角閃石・黒雲母をふくむ花崗閃緑岩。中には角閃石が大型で、柱状、自形を示すものが見られる。また、中粒のものもある。これらは志賀島花崗閃緑岩に類似する。

h) 中性～塩基性深成岩：これはさらに細分される。①粗粒あるいは中粒で、塊状の石英閃緑岩。②中粒、塊状の閃緑岩で角閃石が長柱状のものがある。③中粒、塊状の角閃石斑れい岩。

i) 単斜輝石普通角閃石モンゾ斑れい岩：粗粒、塊状で、短柱状の普通角閃石のあいだを細粒の単斜輝石と斜長石がうめている。

j) 角閃石：中粒で、おもに普通角閃石からなる縞とおもに斜長石からなる縞とが交互する。普通角閃石を多くふくもの、斜長石の多いもの、また、縞が不規則なものが見られる。

3. 石垣における岩石種の構成比率

大きい岩塊のあいだに挿入された小岩塊をのぞき、鑑定された岩塊の総個数は285個で、岩石種別の個数と構成率(%)は表1のようである。玄武岩が64%で圧倒的に多く、次いで、砂岩と礫岩を合わせた堆積岩が23%で、両者で87%を占めている。このように石垣の大部分(87%)は玄武岩と砂岩・礫岩で占められている。残りは、花崗岩類・中性～塩基性深成岩（両者は、地質的に相伴って産する）と角閃岩である。

表1 石垣構成岩塊の岩石種とその個数・比率

a) 玄武岩	181個	63.5%
b) 変質安山岩	1個	0.4%
c) 砂岩	44個	15.4%
d) 礫岩	22個	7.7%
e) 花崗岩	13個	4.6%
f) アブライト質花崗岩	1個	0.4%
g) 花崗閃緑岩	4個	1.4%
h) 中性～塩基性深成岩	10個	3.5%
i) 単斜輝石普通角閃石モンゾ斑れい岩	5個	1.8%
j) 角閃石	4個	1.4%
計	285個	100.0%

4. 石垣構成岩類の博多湾周辺地域における分布

- a) 玄武岩はすべて、新第三紀鮮新世のアルカリ玄武岩に属するもので、博多湾周辺地域では能古島・今津半島昆沙門天山・今山に、溶岩または岩頭として分布する（唐木田ほか、1994）。
- b) 変質安山岩と鑑定された1個の岩塊は、見掛けは白亜紀の関門層群下関亜層群のものに似ているが、肉眼鑑定だけでは眞の所属の判定はむずかしい。
- c) 砂岩とd) 礫岩は、福岡炭田を構成する古第三紀の堆積岩で、姪浜と能古島南部に露出が見られる。さらに、広く見れば、福岡市の西公園、福岡城から南の動物園、鴻巣山付近にかけて分布する。

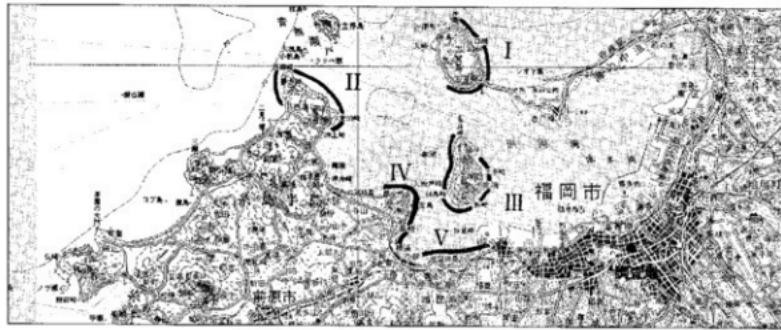
- e) 花崗岩のうち、早良花崗岩に属するものは今宿東方の長垂海岸に露出する。広く見ると、早良花崗岩は福岡市早良区・南区を模式地として、長垂から油山、大野城市牛頭山、太宰府市にかけて分布する。そのほかの花崗岩は、志賀島と宮ノ浦－西ノ浦海岸の志賀島花崗閃綠岩にともなって少量見られる。
- f) アブライト質花崗岩は、長垂の花崗岩、志賀島と宮ノ浦－西ノ浦の志賀島花崗閃綠岩にともなって少量分布する。
- g) 花崗閃綠岩は、白っぽい長石をふくみ、志賀島花崗閃綠岩に属するもので、紫がかった長石をふくむ北崎トーナル岩とは明らかに異なる。博多湾周辺では、志賀島花崗閃綠岩は志賀島と宮ノ浦－西ノ浦海岸に分布し、北崎トーナル岩は糸島半島の小田－津舟崎海岸や能古島北半部に見られる。
- h) 中性～塩基性深成岩は、志賀島と宮ノ浦－西ノ浦海岸の志賀島花崗閃綠岩と密接に隣接する岩石類である。
- i) 単斜輝石普通角閃石モンソーブレイ岩は、成因的には上記の中性～塩基性深成岩の範疇に入るものであるが、北部九州では、志賀島と宮ノ浦－西ノ浦海岸の地域にだけ分布する特殊な岩石である（唐木田ほか、1994）ので、ここでは一応わけて記載した。
- j) 角閃石は、能古島中部と今津半島の三群変成帯を構成する変成岩のメンバーである。

以上の岩石種と産地（分布地）を要約すると表2のようである。

表2 岩石種と産地（分布地）

産地	岩石種
I 志賀島	e)花崗岩, f)アブライト質花崗岩, g)花崗閃綠岩, h)中性～塩基性深成岩, i)単斜輝石普通角閃石モンソーブレイ岩
II 宮ノ浦－西ノ浦	e)花崗岩, f)アブライト質花崗岩, g)花崗閃綠岩, h)中性～塩基性深成岩, i)単斜輝石普通角閃石モンソーブレイ岩
III 能古島	a)玄武岩, c)砂岩, d)隕岩, j)角閃石
IV 今津半島－今山	a)玄武岩, j)角閃石
V 長垂（今宿）－姪浜	c)砂岩, d)隕岩, e)花崗岩, f)アブライト質花崗岩

* b) 実質安山岩の産地は不明



I : 志賀島, II : 宮の浦, III : 能古島,
IV : 今津半島－今山, V : 長垂（今宿）－姪浜

図2 中嶋石材産出図(1/250,000)

5. 石垣石材の出所について

次に、以上のような石垣構成岩類の博多湾周辺地域における地質的分布状況と、石垣における構成比率を勘案して、石材の出所を考察する。石垣石材の大部分を占める〔玄武岩+砂岩・礫岩〕(87%)と角閃岩(1%)は、能古島(図2の産地III)から供給可能である。また、玄武岩と角閃岩は今津半島—今山(産地IV)からも求められる。しかし、産地IIIとだけでは、約5%の花崗岩の存在の説明ができない。長垂海岸の花崗岩を使ったと考えると、比較的高い構成率の堆積岩はすぐ近くの姪浜(昔、砂岩の大きな石切場があった)から産出するので、長垂—姪浜産地が重要となる。約7%を占める〔花崗閃緑岩+中性～塩基性深成岩+単斜輝石普通角閃石モンゾ斑れい岩〕の供給地としては、どうしても志賀島(産地I)か宮ノ浦—西ノ浦(産地II)を考えなければならない。

したがって、大名1丁目の石垣の石材は、広く見れば博多湾周辺の産地I・II・III・IV・Vから供給可能である。しかし、供給地をなるべく近いところに限定し、所属不明のb)変質安山岩をのぞいて考えると、産地III(能古島)や産地I(志賀島)をのぞいても、博多湾西部海岸の産地I・II・IIIだけで、石垣の石材をまかなうことができる(表II)。しかし、玄武岩の構成比が大きいことからみると、船の便もあるので、やはり能古島からの搬入の可能性は高いと考えられる。

なお、石材出所に関して重要な問題は、産地II・IV・V地域に沿って構築されていた「元寇防塁」の石材が、福岡城の石垣に再利用された可能性はないだろうかということである。大原海岸などにまだ残っている「元寇防塁」の石材調査は、この意味で大切なことと考えられる。

〈引用文献〉

唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊「福岡地域の地質」「地域地質研究報告」1994 地質調査所 192P.

V おわりに

本調査では福岡城中堀跡を初めて確認したが、本章では調査における成果や問題点を列記してまとめてかえたい。

1. 石垣の普請

本調査により初めて中堀の位置を確認できた。さらに、文化9年(1812)～同10年(1813)に中堀・肥前堀を素掘の堀から石垣で護岸した堀に改築を行ったとされる記録が実証された。

2. 石垣の基礎

本調査地における石垣構築は、地形根切りを行い、径25cm前後の松の丸太(胴木)を一列に置き、その上に石を積み上げる簡易な基礎工法が用いられている。胴木の滑りを防ぐための杭などは認められなかった。この工法は同じ中堀の福岡城跡37次調査においても認められたが、福岡城跡36次調査においては確認されなかつた所見を得ている。これは、36次調査においての基礎確認範囲が極めて狭い範囲であったことに因るものと思われ、基本的には、中堀の石垣全面において松の丸太を基礎に用いたと考えるのが妥当であろう。一方、薬院新川の石垣では、胴木と控木とを梯子状に組合せた物(松)が石垣の基礎に使用されている。この違いは、地盤の安定性や石垣の規模の違いに起因するものと考えられる。

3. 石材

本調査地における石垣に用いられた石材の大きさは、P.5の図に示すとおりである。同じ中堀の第36次・37次両調査地で用いられている石材とを比較すると、第36次調査地点は全体的に小振りな岩塊であるのに対し、37次調査地点は全体に大振りな岩塊で構成されている。本調査地の岩塊は、大きさ的に両者の中間に位置する。このため、際立った違いは認められないが、同じ堀でも地点の違いで石垣構築に用いた岩塊にばらつきが認められる。これは、意識的に岩を使い分けたのではなく、供給地の違いによるものと推定される。

4. 石材供給地

石垣に使用されている石材の87%が能古島産の石が使用されており、文献記録を裏付けることとなった。しかしながら、能古島以外の産地の石材が使用されていることや石材の磨減度に差があること、さらには石垣に使用された材量が試算でも膨大であることなどから石材の供給地を考えると、記録には残っていないものの、福岡西辺地域を中心とした広範囲な地域から集めたと考えるのが自然であろう。また、元寇防塁や古墳の石材も使用された可能性が高い。

5. 石垣の材量試算

今回検出した石垣は、長さ14m、高さ1.6～2.4m、立面積20m²である。石垣そのものだけで283個の大きな岩塊が使用されてる。城絵図などから、中堀の周囲を約1,230m、改築以前に既に石垣となっている堀の東西両辺にある赤坂門、薬院門に通じる通路および両門の周辺部の長さを約180mと想定すると、石垣を構築した長さは約1,050mとなる。調査所見及び記録などから石垣の高さを2.4mとした場合、石垣の総立面積は2,520m²となり、調査区と同じ状況で石垣が築かれたとすると、約36,000個の大きな岩塊が必要になる。重量にしておよそ3,000t前後が推定される。また、石垣の裏込には、石垣の長さ1m当たり150個ほどの人頭大の石が用いられていることから全体では約157,000個が必要となり、石垣の間に挿入された小岩塊を含め

ると約2,000t弱と推定される。以上から、中堀の石垣改築には5,000t前後の石材が使用されたと試算される。同様に肥前堀を試算すると6,500tになる。

6. 中堀石垣の現況

中堀は昭和初頭までに埋められ、市内中心部における新たな宅地として供給されたため、土地の境界の80%以上が石垣と重複する結果となった。このため、石垣の所在する地において開発行為が行なわれる場合は、調査は極めて困難な状況であるといえる。また、既に建設されている高層集合住宅や商業ビルは土地の境界近くに建てられていることから、同地における石垣は消滅している可能性が高い。したがって、現在に残る堀の石垣の歴史的、学术的再評価と保存の方策とが強く望まれる。



36次調査石垣(北から)



37次調査石垣(南から)



36次調査石垣(北から)



37次調査石垣(南から)



36次調査石垣(西から)



37次調査石垣・木柱(西から)

福岡城跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書

<第498集>

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

平成9年3月31日

印 刷 ダイヤモンド印刷株式会社

福岡市東区松田二丁目9-32

FUKUOKAJŌ NAKABORI

Excavation and Studies of
The Fukuoka Castle
in Fukuoka



Editor

Tadashi Takimoto

Contributors

Yoshihumi Karakida
Tadashi Takimoto

March 1997

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN